

# 垣根が肥える島





## ①『街島』と痩せた『垣根』

### 「私的空間の公共的利用」

近代以前の共同体をそのまま復刻することは難しいように思う。それは、互いに意思疎通をはかる「必要性」の結果としての存在していた。「必要性」を根源とした共同体形成であるから、共同体が崩壊しそうになってもまた「必要性」によって再構築されるのだ。ここには再現性が常に存在していた。

しかし現代において互いに意思疎通をはかる「必要性」を日常の中に迫られることはままない。一人で生きていけるため、時折現れる共同体的友好関係は何かの「奇跡」の産物であり再現にはもう一度「奇跡」が必要である。街における共同体は、この「再現性」を獲得することが持続可能な街になることではないだろうか。(関係が薄れても自然に再構成されてしまうこと)

では、現代においてその再現性を得るために必要なことはなんだろうか。

そのために現代における共同体を考えたい。  
ここでみたいのが、こんなにも多様性が認められる世の中が成り立つ理由である。なぜ多様な人々を認めることができるようになったのか、そして多様性を認められない場合というのはいつ起きるのか。私は、「選択可能性」に重要性があると思う。人は、多様な人々の中から自分にあった人を選ぶことができ、今やその選択肢は地球の裏側すらも含まれるようになっているのである。それは自分に合わない環境・人間を選択しなくてもいい状況であり、つまり多様性は自分に合わない人と無関係に生きることができるようになったために獲得したといえるのではないだろうか。選択肢の多様化、これが現代の特徴の一つである。そして選択肢の多様化は、「必要性」による共同体を解体したのだ。

「LINEのグループは共同体かどうか」という問題がある。確かに大きな全体から相対的な位置に形成しているグループであるが、「共同体」という言葉の持つ運命共同体的な語感を持ち合わせていないように感じるし、場所と関係がないグループである。しかし一方で、そこで知り合った人と現実で会ったりすることは珍しくない。オフ会を開き、日常的に遊ぶようになり、果ては結婚する事例すらもある。つまり**この「LINEのグループ」は、育つことで共同体になる可能性を持っていることである。そして、(結婚というわかりやすい明快で極端な例であるが)これが現代における共同体の成り立ちなのではないだろうか。**「個人の選択」によって選んだ集合が育つことで共同体になる、また人を集めるという「個人の選択」することによって、それが育ち共同体になる。逆をいえば共同体の根源は「個人の選択」であるということである。「個人の選択」これが「必要性」に変わる共同体の源泉であるように思うのだ。



再現性の話に戻る前に、もう一つ確認したいことがある。この共同体の源泉について「個人の選択」は2種類ある。「集まるという選択」と「集めるという選択」だ。どちらも重要であるが、先に存在している選択は後者であろう。再現性の話において、共同体の源泉により近いものは「集めるという選択」になる。

それで再現性の話であるが、このとき、再現性を帯びる条件は二つ。

- 1.「集める選択」を選ぶ個人が一定数生まれること
- 2.そしてそれが育って行けること(持続・繰り返されること)

まず前提として、このような共同体の成り立ちにおいては、「集まる気がない」人々の元には共同体は生まれない

ことを確認しておく。これはどうしようもないように思う。

しかし住民の意識調査の中で、希薄化したコミュニティを回復したい、また人と関わるようにしたいという意志を持つ人は少ないながらも存在するし、またそれはその日の気分によっても変わるだろう。選択肢が広がった今、選択するハードルは極端に下がり選択は揺らぎやすいものになった。SNS上での掲示板のスレッドやFBのグループなどは集まることへの選択は、確かに集まろう・集めようという意思が存在していることを示している。「集める選択」が選ばれるということと、掲示板のスレッドを立ち上げることは同じ平面で考えられるのだ。

また1.の条件は「個人の選択」であるということも強調していいのではないかと考えている。「集めるという選択」を集団でする時の源流は、やはり『「集めるという選択」を

する集団」を集める個人になってしまう。問題が帰ってきてループしてしまうのだ。とにかく、再現性のある共同体に重要なのは、「共同体の源泉を個人にする」ことに思われる。

一の条件を達成する時に重要になる軸は非常に多い。そこで重要だと思うことの一つは「身軽さ」だと思う。「共同体の源泉を個人にする」とき、個人の判断で選択するにはパブリックな場所ではできない。相談して決めていかねばならず、一人でも反対の者が出たのなら始まらないし、互いの利害を調整しなければならない。それは到底個人の選択とはいえない。だから私は、私有空間においてのみ「個人の選択」を行えると思う。こうすることとで「個人の選択」が掲示板にスレッド立ち上げるのと同じような身軽さを手に入れることができるのだ。

コミュニティが生きていくために必要でなくなりつつある

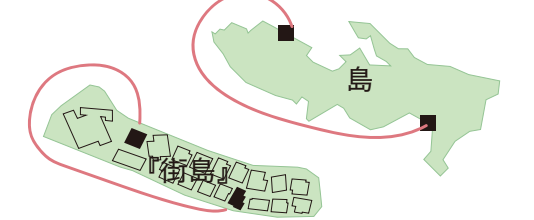
現代においても、しかしコミュニティは消えることはない。趣味を共有するとかSNSで出会ったとか、小さな個人の出会いを膨らませて共同体になるように、住宅という個をスタートしたコミュニティが成立しうるはずだ。**必要があるからではなく、人を招きたいから招く、そのために私的な空間を公共的に利用することが郊外住宅地のコミュニティのこれからののではないか。**

## 郊外住宅地の街区

街の構造について考えると郊外住宅地では、同じ街区に立つことが特別な意味を持つことはない。街の構造としては京都の町屋と同じく、道を中心としたコミュニティ単位で、裏側の家よりも、向かいの家の方がコミュニケーションの距離が近いと言える。一方できっちりとゾーニングが施されているため、自宅、スーパー、公園、学校などの生活拠点が混ざり合わことはなく生活領域が、面上に広がるのではなく、点として存在した点同士は広大な住宅群によって隔てられる。家の周辺は、街に対して閉ざされた家しか存在せず、中心になりえるはずの道も正しく整備され話題を提供しない。短期間に街が構成され歴史がまだまだ浅い郊外住宅地では、道は本来の道路としての意味しか持

たず、publicに上書きが施されない。

そのように考えたとき、むしろここでは、物理的距離が近く、整然と配置されている街区の内側にこそ、コミュニティが育ちえるのではないか。

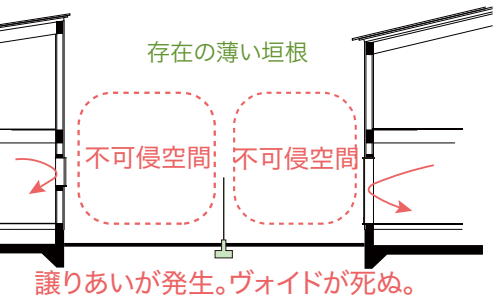


また住宅地の街区は街という海原に浮いた島のようなものである。家と家は陸続きで道を介さないつながりが可能であるが、本来の島でも見られるように、島内の繋がりや、陸ではなく海(=道)を介して行われる。この島のような街区の中は、プライベートがぶつかる空間であるが、しかし、整然とした敷地割のおかげで、それぞれの庭は、一体的な空間になっていたり、庭でしか起きないような挨拶が生まれたり、道よりも親密な付き合いが生まれている。このまるで島のような街区を『街島』と呼びたい。この街島の中に、個々の住宅から始まる新たな繋がりの方を考えた。



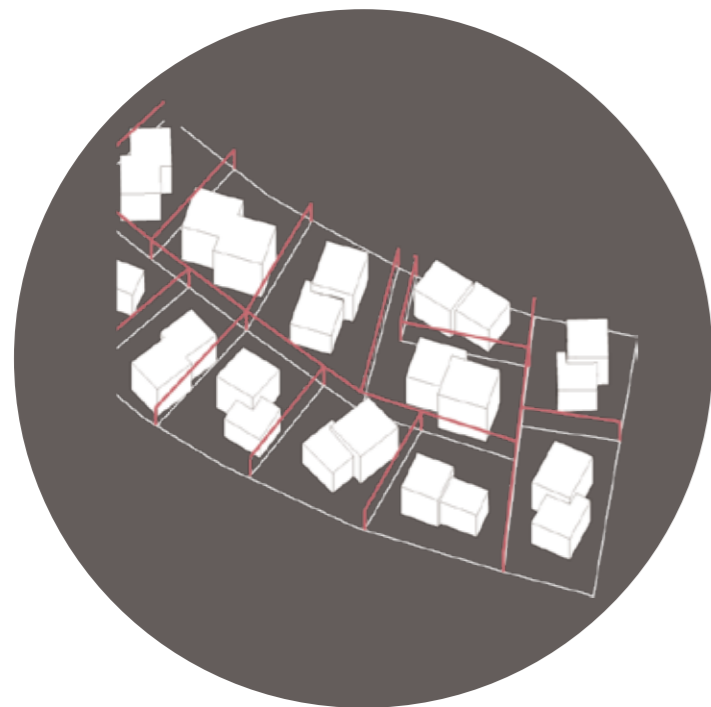
## ②肥大化する垣根

『街島』の内側を区切るのはプライベートを守るための共有物『垣根』である。フェンスや低いブロック、生垣など多様な『垣根』が存在するが、しかしこの垣根の存在感が薄いことは、人のつながりは生まれない。フェンスのような垣根で仕切られた隣地境界は、庭というプライベートをパブリックに近づけるだけで、互いの譲りあいによって、住人はより家に引きこもらせてしまうだけだ。『街島』に繋がりをうむためには、垣根を肥やすことが重要なのではないか。



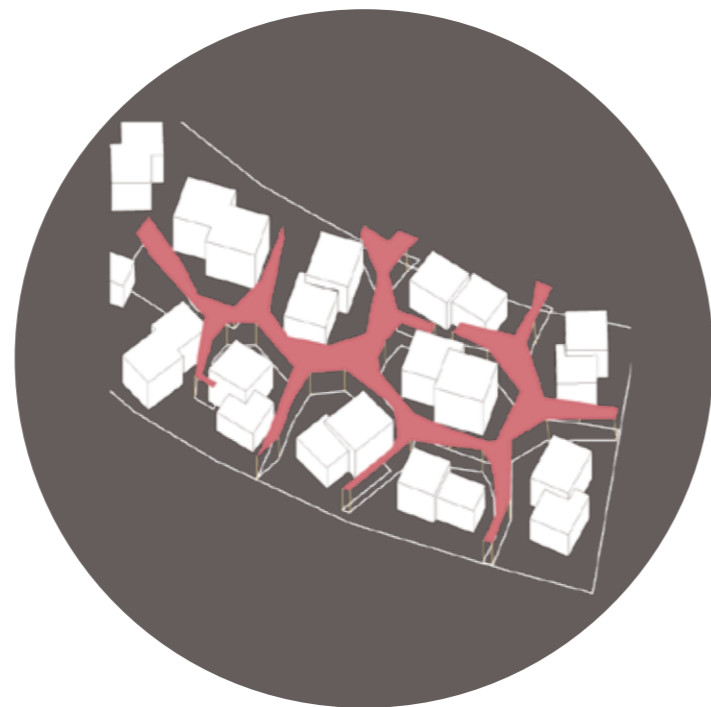
この『垣根』の存在を大きくし、主要なエレメントの一つとして建築計画を行う。

垣根は、一般的に敷地境界を示すために印でもあり、特に郊外住宅地では宅地造成とともに設置されることも少なくない。そこに立つ住宅や生活スタイルに合わせて姿を変えることなく、位置ように敷地をおおって建築計画の一部に組み込まれない。安く透明なものに近づけることでは、垣根は貧しくなる一方で、敷地境界を薄くして行くばかりである。だから、**この垣根を境界に厚みを持たせ、住戸に接続し、千切れながら壁を乱立させる**ことで、プライベートとパブリックが緩やかに混ざり合う多様な空間となる。街区には住宅だけでなく、『垣根』という構造物が場所を作り、それが肥えることで『垣根』の周りに「新たな居場所」が芽吹くのだ。



# ①『痩せた垣根』が隔てる『街島』

敷地境界にたつ垣根。安価で一様な垣根は、中途半端な遮蔽性で、住宅の周りを痩せさせている。



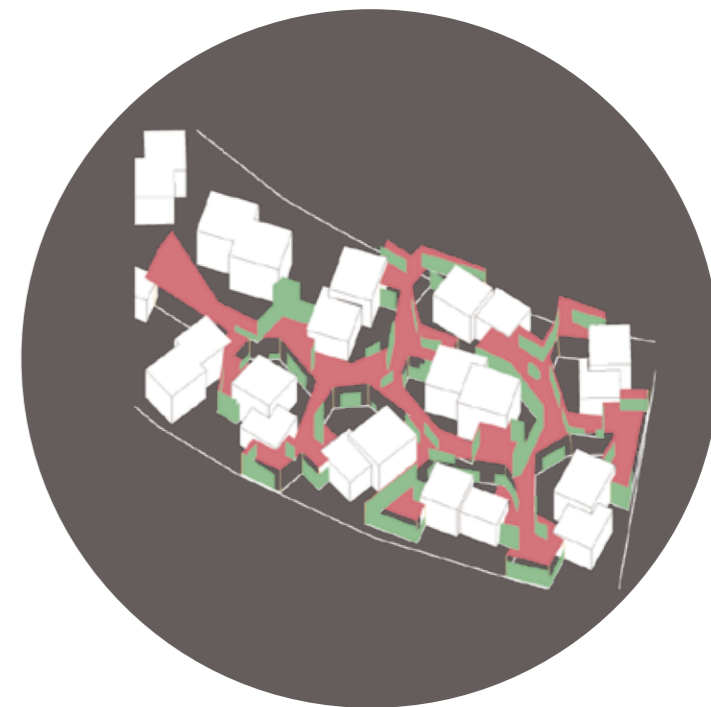
# ②『垣根』の肥大化

この垣根をより存在感のあるものとし、構造物として住宅とともに建築計画を行う。



# ③住宅に取り付く

住宅を囲うだけだった垣根は、住宅に接合し、人を招き入れる「私的な公共空間」を作り出す。



# ④『垣根』が千切れながら地形へ

一枚の壁ではなく、層状に重なるような壁となり、他者の気配が見え隠れする地形を作り出す。

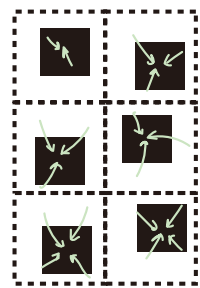




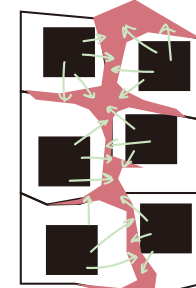
### ③Edge→Center Path

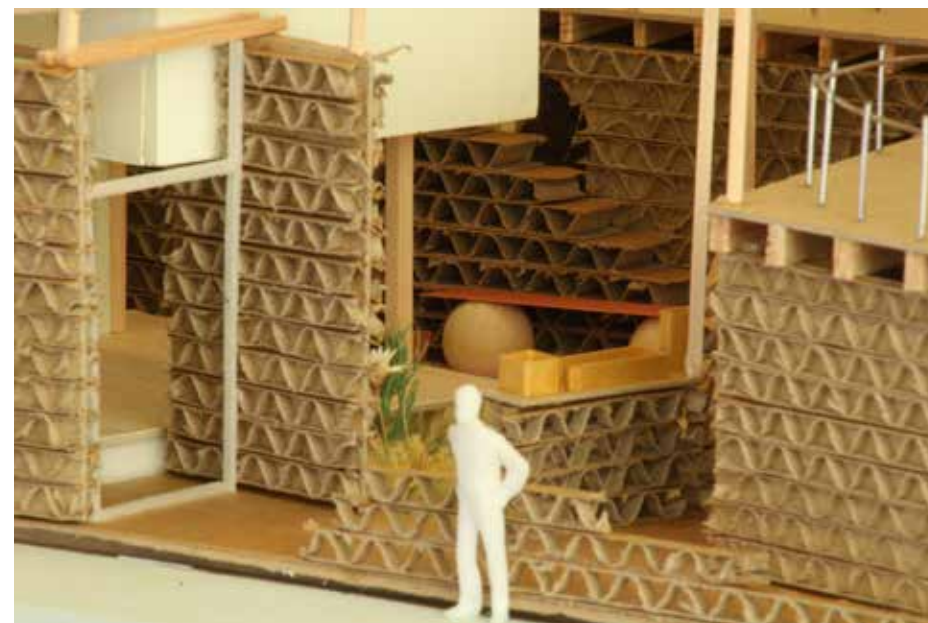
『日常生活の Edge』であった垣根は、『日常生活の Center Path』となる。垣根の作る多様な地形が、机、椅子、日陰などで過ごすためのエレメントとなり、垣根が生活空間の一つへと変化する。そうして、住人同士を隔てるのではなく、集まる中心地となり街区の新たなテーマになるだろう。

垣根=edge



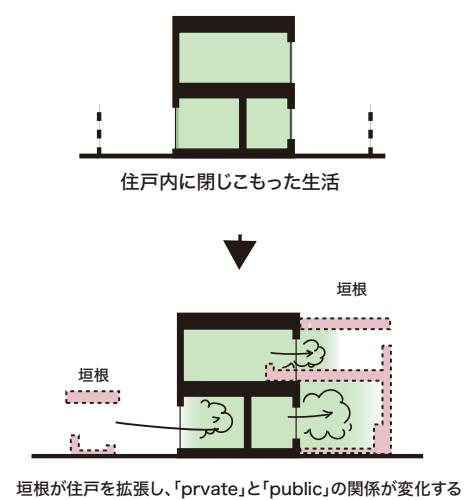
垣根=Center Path





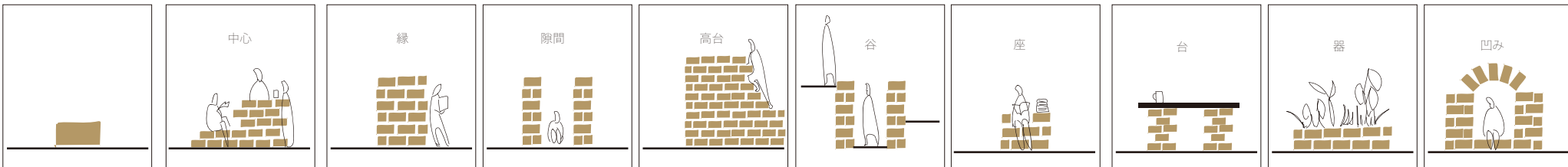
#### ④ 住むことの拡張

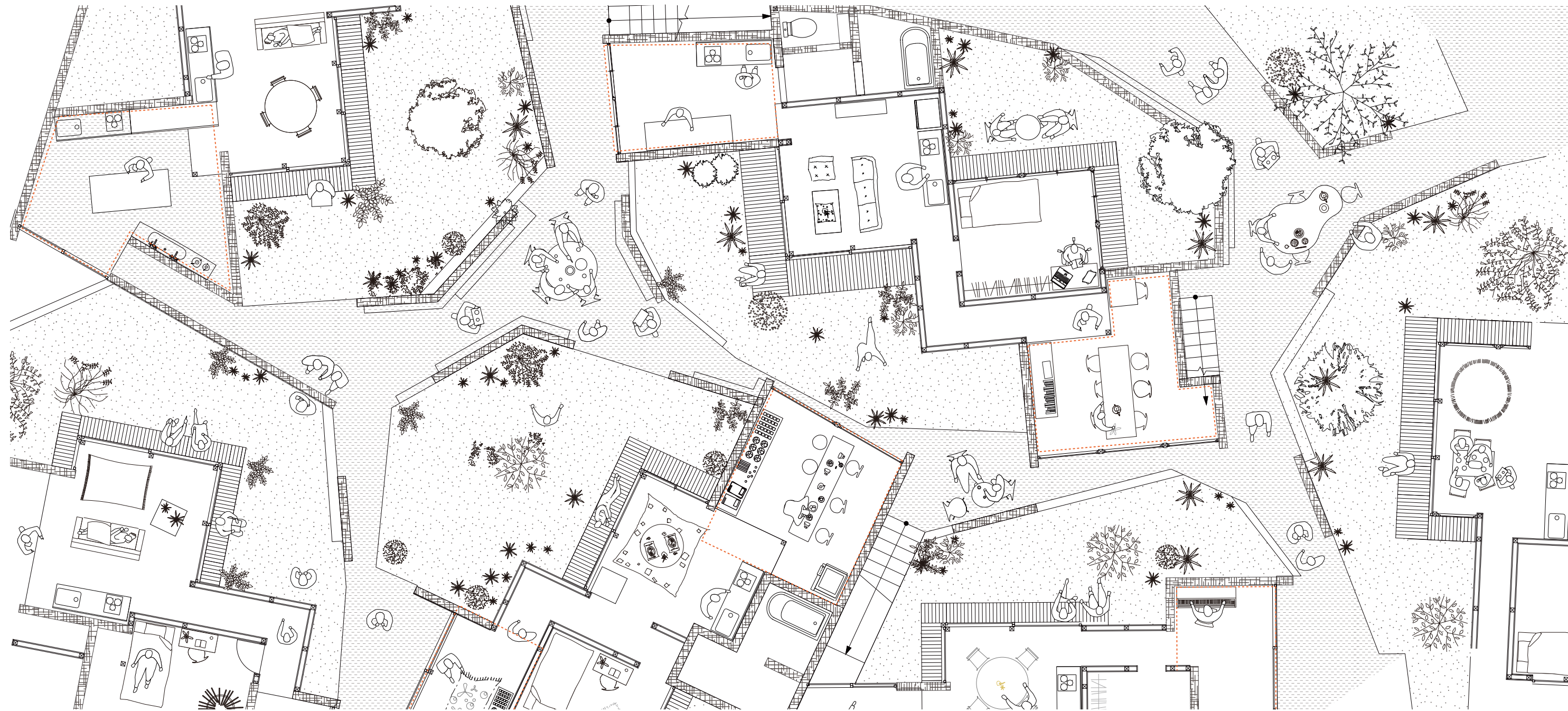
垣根は住宅に絡みつき内部を拡張することで生活空間を拡大していく。プライベートをしっかりと作ること、風呂場の外に裸で出れる庭ができたり、逆に緩やかな境界を作ること、隣人が入って来れたり、垣根は住戸と多様な関係性を持ち生活を拡大していく。**住むことを限定するのではなく、住むことを拡大するために垣根があるのだ。**



## ⑤垣根が作る地形

『垣根』は、日干しレンガを積み上げることで形作られる。腰掛ける台になったり、テーブルになったり、心落ち着く隙間になったり、花壇になったりと、自由な形状で生えている。シンプルな工法で作られたこれらの環境は、自分の生活にあうよう絶えず更新することができ、住人は自分にピッタリ合う環境を作り出す。





## ⑥私的な共有空間ー借りた醤油は共有物かー

この集合住宅には、**自分の家だけと他人が入ることのできる部屋がある。**「垣根空間」と「住宅」の接合部であるこの場所は、住人によって所有される共有空間で、客間のようなスペースになったり、子どもたちの勉強部屋ができたり、図書室ができたり、シェアキッチンができたり、アニメの部屋、プロレスの部屋になったりと住人の個性で色付けされ他場所になる。

必要性から生じるコミュニティではなく、「何かをしたい」という個から始まるコミュニティを醸成する。

「隣に醤油を借りる」というエピソードがコミュニティの代表的な振る舞いとして表現されるが、この時、**醤油は共用物なのだろうか。**確かに、その瞬間、醤油は2人のものであるが、だからといって、この醤油を共有物とした途端に、この出来事の輝きは失われるのではないか。

共有物の醤油は、共有されることがあらかじめ許可された醤油である。だからこの醤油を私が使うことは、何も負い目を感じる必要もないし、誰にとっても不思議なことではない。

一方で、隣人の醤油は、決して共有されるはずのなかったもの

である。私がこれを使うというとき、私は隣人の寛大さに私が甘えているのであって、多少のおい目を感じるころがあるはずだ。しかし、**この非対称な人間関係こそコミュニティを育む栄養なのではないか。共有物を共有するのではなく、私物を共有するような空間がこの集合住宅にはある。**

「こんばんは。ごめんなさい、醤油が切れてしまって、」

「あら。ちょっと待ってくださいね。  
はいこれ。うちの醤油です。使ってください。」

「すみません、ありがとうございます。今、肉じゃが作っていて、後で持ってくるので、よかったらぜひ。」

「ありがとう」

